鷹・鷹場・環境　NEWS　2018.4.9

Vol. 04

鷹・鷹場・環境研究会
The Society for Hawks, Hawking Grounds, and Environment Studies

日本ワシタカ研究センター訪問記

相馬　拓也

2017 年 12 月 26 日尾張旭

年の瀬の 2017 年 12 月 26 日、アブダビの International Festival of Falconry 第 4 回大会でもお世話になった鷹匠・中島京也（なかじまけいや）氏の運営する、日本ワシタカ研究センター(The Japan Falconiformes Center)を訪問させていただきました（写真 1）。猛禽飼養技術について、多くの示唆に富んだご意見をいただきました。「鷹・鷹場・環境研究会」の活動紹介もさせていただき、今後の協働に向けて意見交換も行ってきました。

参加者メンバーは以下 4 名で訪問させていただきました。

○福田 千鶴（九州大学）
○武井 弘一（琉球大学）
○山﨑 久登（都立新島高校）
○相馬 拓也（早稲田大学）

はじめに中島京也氏は日本ワシタカ研究センターの常務理事・所長として、「傷病鳥の治療・放鳥」「猛禽類生息環境の保全・環境評価」「ワシタカ類の基礎研究」など、幅広く猛禽類の保護・研究の実務に携わっていらっしゃいます。またご自身も鷹匠として幅広く活動されており、江戸期から伝わる伝統的な飼養術・鷹狩技術の継承保存に尽力されています。こうした活動は近年世界的にも評価されており、世界鷹狩連合(International Association for Falconry & Conservation

写真 1　鷹部屋について解説いただく中島京也氏

写真 2　オオタカ、ハヤブサ、ハイタカの大緒

of Birds of Prey: IAF)の副会長（アジア担当）として、日本の鷹狩技術や文化の敷衍にも努めておられます。

とくに飼養に関する知見は、歴史学や文献研究に新たな知見と地平を開くものと思われます。現代の鷹狩では、オオタカでもハヤブサでも、1 歳未満の若鳥が扱いやすいとされています。とくに猛禽類のメスは習熟が早く、狩猟での能力もオスを上回る傾向があります。その反面、オスは小さい鳥ほど集中力が持たないとも言われているようです。さらに、飼養が進み 2～3 年目となると、タカ自身が訓練内容を覚えてきてしまい、実際には 1 年目の個体と同じようには調教できないとのことでした。かつての鷹匠も、およそ 50 日間程度をかけて馴らしたといわれているようです。また吉田流、諏訪流などの流派によって調教や狩りのスタイルが異なるものの、使用する鷹具や紐などの結び方等にそれほど流派間の違いはないとのことでした。もっとも顕著な違いは、諏訪流は呼子の笛を使ってタカを呼んだりすることのようでした。

また「鶴捉りの鷹」についての知見を尋ねたところ、当初から「鶴捉りの鷹」といった特定のタカの育成を目的にしていたわけではないとの見解を示していただきました。実際には、何度も狩場で挑戦しているうちに捕れるようになったのではないとか、とのことでした。また、ツルは通常の獲物ではなく、特にナベヅルを儀礼的に取っていたと考えられるようです。ツルの心臓が万病の薬になったとの故事から、こうしたツルを捕えることのできたタカは止まり木に繋ぐ際に使用する紐「大緒」を紫色にかえるとのことでした（写真 2）。これによって、「鶴捉りの鷹」は一目でその能力を識別できたとされています。一方、ハイタカで獲れる最大の獲物はコガモであったそうです。実務者として大変説得力ある意見をうかがうことができました。

日本の鷹匠道具「鷹具」の優れた特徴についてもうかがうことができました。その一例に、ハヤブサにかぶせる頭巾ですが、布地でとても脱ぎやすくなっているのが日本の特徴とされています（写真 3）。これはハヤブサを手の上に載せた際にしか使われず、狩場で獲物に向かってハヤブサを素早く放つ時にすぐに脱げるようにした工夫とされています。また布地は軽く、ハヤブサが頭を振っても脱げにくいとのことでした。この点は、

写真 3　ハヤブサの頭巾（右）、左は中東・欧米などで用いられる目隠し帽（※写真は中島氏ご提供）

写真 4　歴史史料に忠実にもとづいて復元した江戸期の鷹部屋。タカは各個室に納められている。

いわゆるレザーで成型した「ヘルメット型（アングロ・インディアン型）」の目隠し帽をかぶせるアラブや西欧とは顕著に異なる点と考えられます。アラブや西欧では、個体の大きさや成長によっても、目隠し帽を替えなければなりません。この点、日本の頭巾は布地で制作も簡便であることに加え、猛禽への身体的負荷も軽減されているものと思われます。

さらに今回の訪問の目玉として、歴史史料を参考にして復元された江戸期の鷹部屋も見学させていただきました（写真 4）。鷹部屋の面積・高さの寸法も正確に再現されています。とくに、窓枠には竹筒をかぶせた格子棒が用いられ、タカが飛び出そうとしても、竹筒が回転して衝撃を和らげる工夫がされていました。内部や詳細につきましては本書面ではご紹介できませんが、中島氏の日本の鷹狩文化の継承・復元への並々ならぬ熱意を物語って余りある一面をあらわしていると感じました。

かつて江戸時代、鷹匠は社会に広く認知された専門職として活躍し、なかでも猛禽飼養や狩猟などのすべてに通じた存在が鷹師であり据前であったといわれていました。猛禽飼養の技術は高度に政治的・外交的な手段であったことは間違いありません。しかし、猛禽を自然からの使者として、自然界と交渉し、猛禽や獲物の生態に早期の科学的で実証的な視点をもたらしたのもまた鷹狩と鷹匠の知と技法のためであったと考えられます。歴史研究に実務者との協働の地平が開き、かつ不可欠である認識を、訪問者一同強く感じた意義深い訪問となりました。

センターの前で記念撮影

帰りは尾張旭の駅まで送迎までしていただき、また今回の訪問を実現させていただきまして、中島京也所長と日本ワシタカ研究センターのみなさまに感謝の意を表します。

豊後日出城主木下延俊『慶長日記』にみる鷹狩り記事　　福田　千鶴

はじめに

近年、鷹狩りの秘伝書である鷹書の研究が進められている[1]。これに対し、歴史学の側からは、実際の鷹狩りの場における鷹詞の使用例や鷹狩りの手法についての実例を一次記録から蓄積していくことが課題となろう。そこで本稿では、豊後日出城主（３万石）木下延俊の日記[2]を取り上げたい。延俊は、豊臣秀吉の本妻浅野寧の甥にあたる。

日記は慶長 18 年（1613）元旦から 12 月晦日までの 1 年間分である。家臣の中澤清介と神田甚吉が、５日に１度宛、当主の行動を中心に記録した。慶長 17 年の暮れより江戸に滞在していた木下延俊は、翌 18 年 2 月 2 日に将軍徳川秀忠より帰国の暇を得た。4 日には早くも江戸を発ち、駿府、名古屋を経由し、2 月 20 日に京都二条に到着した。その後、約 4 か月近くを在京し、6 月 28 日に京都を発って、翌日大坂城の豊臣秀頼に礼を済ませたのち、伊予路を通って 7 月 5 日に日出に到着した。それからは、慶長 19 年に始まる江戸城普請のために出府するまで在国したが、日記は 12 月晦日をもって終わる。よって、7 月から 12 月までの在国期

1　鷹書の研究史は、中澤克昭「中世の鷹狩に関する研究の動向と課題」（『鷹・鷹場・環境研究』2、2018 年）を参照。
2　二木謙一・荘美知子校訂『木下延俊慶長日記』（新人物往来社、1990 年）。

間が記されるのみであり、鷹狩りシーズンの前半しか判明しないのは残念だが、近世初期の鷹狩りの事例として豊富な情報を提供している。以下、２節に分けて鷹狩り記事を紹介する。

１、鷹の捕獲

木下延俊が在国中の鷹に関する最初の記事は、9月3日の条である。

１．九月三日　四つ時分市右衛門方よりはいたかうち候てこし申し候、

午後 10 時頃に市右衛門が鷂を持参したという。この「うち候」の意味については、１の他には次のような用例がある。

２．十二月六日　御鷹野へ御出候。晩ニくもりきり雨ふり、御戻り候て、御たかうち候て参り候、

３．十二月十一日　ひさしにてはやぶさのしやう[3]うちて参り候、

４．十二月十九日　殿様野鴈を御うち成され候也、御鷹野より御帰り候、

「鷹犬詞語彙」（『放鷹[4]』633 頁）によれば、「ウツ」には次のような意味がある。

ウツ　打。犬に策を教ふるを打とも附るとも入るともいふ。

ウツ　歐。餌を吐き出す。

ウツ　山を刈ること。これに片うらうつ及諸うらうつという別あり。（鷹法）

いずれにも、該当するものがない。そこで、鷹書研究会編『鷹之書』[5]五―（32）「鷹なつけ様の事」をみると、次のような用例がある。

一、鷹を先山より打をろして参候時、其侭据立て申事悪し。

この訳として、「網掛けで捉った鷹を山から降ろしてくる時、そのまま手に止まらせることは悪いやり方である」と説明し、「打をろして」の解説として、「「網掛け」で捉えた鷹を山から降ろすこと」であり、「「網掛け」は十月初旬から十一月にかけて渡りの途中を捕獲するが、霜が降ってからの鷹は「霜かぶり」と言って、野生の時期が長いため仕込みにくいことがある」と説明している。

１～４は単に「うち」とあるので、「打をろして」と同じ意味とするためにはもう少し事例がほしいところだが、１～３は「網懸け」で捕らえた鷹を日出城に持参したという解釈にとれなくもない。とはいえ、４にあるように野鴈に対しても「うち」を用いているので、単に捕獲するぐらいの意味でとっておきたい。

１のハイタカは雌雄不明だが、8 月 6 日に兵介という人物が「このりの阿鷹」（児鷂・雄のハイタカ）を据えて参上しているから、単にハイタカとあれば雌の鷂をさすのだろう。２の鷹の種類は不明だが、その他の記述からして単に鷹とあるのは「大鷹」を指す可能性が高い。３はハヤブサのショウ（小・兄鷹）とあるので、鶻（雄）とわかる（雌の表記は隼）。なお、「ショウ」は大鷹の雄の呼称とされているが（『放鷹』481 頁）、ハヤブサにも用いられることがあったことがわかる。

このように鷹の捕獲記事は 3 例と少ない。ただし、これは延俊の手元に残された鷹に関してのみ特記された可能性も残る。12 月になっても鷹（ハヤブサ）の捕獲は続けられており、12 月 10 日には荒鷹（捕獲してまだ馴れていない鷹）に「まろばし（転鳥）御かい候」という、糸をつけた鳥を鷹に捕らえさせる訓練をしている。

なお、鷹の捕獲に関しては、次の史料の解釈を検討してみたい。

九月二十九日　昼過ぎより鷹野ニ御出候也。御手鷹、若鷹壱つ取り申し候、とやの八助鷹四つ取り申候、

日記の校訂者である二木謙一氏は、これを次のように解説した（179 頁）。

鷹野とは鷹狩、すなわち鷹を使って山野で鳥獣を狩ることである。しかし、この日は「御手鷹、若鷹壱つ取り申し候、とやの八助鷹四つ取り申し候」などとあるのによれば、鷹そのものを捕獲したようである。（中略）これより延俊は、しばしば鷹の捕獲に赴いている。

要するに、「取り申し候」とあるところを鷹狩りではなく、鷹そのものの捕獲と解釈している。しかし、鷹の捕獲は危険を伴うものであり、殿様自身が出向くことは考えにくいし、先ほどの「うち」、つまり「うつ」ことが鷹の捕獲を意味するとすれば、ここはやはり鷹狩りで獲物を得たことの意味で解釈すべきだろう。「御手鷹」とは、延

3　翻刻では「はやぶさのしゆを」とあるが、「しやう」の誤り。

4　宮内庁式部職編『放鷹』（吉川弘文館、1931 年）。

5　鷹書研究会（中部大学）『鷹の書―諏訪藩に残る『鷹書（大）』の翻刻と注解―』（文化出版、2008 年）。

俊自身が拳に据えた鷹のことである。そこで、9月29日の条を解釈すれば、次のようになる。

> 昼過ぎより鷹狩りに（延俊が）御出かけになった。（延俊の）御手鷹でかつ若鷹（一歳の鷹）が（鳥を）一つ取り、鳥屋（鷹匠）の八助が使う鷹が（鳥を）四つ取った。

この他にも「取る」の用例は多くありので、次節でさらに取り上げることにする。以上の検討から、木下家では鷹や鳥を捕獲することを「うつ」と称していたとしておく。

２、鷹の調教

鷹の調教に関しては流派や鷹の種類によっても異なるし、鷹の年齢、鷹にどのような獲物を取らせるか、によっても様々に異なるようである。それらは口伝によるところも多い。そのようななかで、日記からは次のような鷹の調教の記事を拾うことができる。

> （九月二十日）　御鷹今日より御おきわたし候、

この日は天気もよく、終日、延俊は二の丸の数寄屋の露地（ろじ）で過ごした。そのなかで、御鷹の喚渡（おきわた）しが始まった。「鷹犬詞語彙」（『放鷹』636 頁）には「オキ・ワタリ　喚渡」とのみある。『鷹の書』五（８頁頭注）では、「おきたて」の解釈として、「招（置）き立て　ある距離から餌を見せて拳に呼び戻して。拳に招き寄せて」と説明する。その本文では、片鳥屋の鷹（二年目の鷹）に置き渡りもしないで鷹狩りに用いることを戒めていることからも、本格的な鷹狩りをさせる前に、鷹匠の呼び戻しに応じるように鷹を飼いならすことを意味した。この喚渡しから７日後の 27 日に、延俊は今年初めての鷹狩り出かけた。

> 二王に取かひニ御出候、とやの八助鷹貳つとり申候、

「御出候」とあるところから、延俊自身が鷹狩りに出かけたとわかる。同行の鳥屋（鷹匠）の八助が鷹で鳥２羽を取ることができた。なお、ここで八助が鷹２もとを捕獲したという意味で取るのは難しい。それは「取かひ」の解釈にもかかわってくる。

「取かひ」とは「鳥飼」のことで、『放鷹』（673 頁）では「雉子の左の片胸を沢山に鷹に食はすこと」と説明しているが、実際には食べさせる鳥は雉子に限らず、鷹が捕獲した獲物を食べさせる行為を指す。この訓練により、鷹の狩猟意欲を損なわないように調教するのである。

『鷹之書』一―（５）新鷹鳥飼之事では、次のように説明する。

> 今日鳥飼んと思ふ日ハ鷹の肉相を能々見つくろひ、必弱き鶉あらは拳はなれ鷹の知れぬ様に羽合へし、（中略）取飼て後村へ入鷹を暫し休め、その後帰るへし。必ず取飼前後に煩ひ出るものなり。心を付べし。

要するに、いきなり野鳥を捉えさせるのではなく、弱った獲物を獲らせて鷹に成功体験を積み重ねさせる。そうすると、鷹は狩猟意欲が高まっていく。逆に最初の狩猟で失敗すると、鷹は獲物を取りに行かなくなる。鷹狩りの成功には、いかに鷹のメンタル・ケアをするかということも重要な要素だった[6]。

しかし、八助の使った鷹は人間が用意した弱った鶉等ではなく、いきなり野鳥を２羽捕らえた。要するに、「鷹貳つとり候」とあるのは、初鳥飼で野鳥 2 羽をとった優秀な鷹であることを記したものと解釈すべきだろう。その 2 日後の 29 日には、既述のように延俊の御手鷹（若鳥）が鳥１羽を取ることを成功させた。10 月 1 日には、昼過ぎに鷹狩りに出かけ、若鷹２もとの取飼をした。この段階でも若鷹の調練が続けられた。

10 月 20 日の鷹野では、御手鷹を雉に羽合わせたが、人がおさえに行くのが遅くなり、取り逃がした。11 月 6 日には仁王山へ大鷹の鳥飼に出かけたが、これもうまくいかなかった。その後、鷹匠のもとで調整が続けられたのだろう。11 月 10 日の鷹野では、「御鷹一段ト取る、なり能く候也」と鷹が順調に仕上がっている様子が記される。11 月 13 日には「御鷹もとりかいニ遣はされ候、みな／＼とりかい申し候」とあり、全ての鷹の取飼が終了したことがわかる。

それからというもの、11 月 17 日、19 日、22 日、23 日、25 日、27 日、12 月 2 日、5 日、6 日、7 日、8 日、12 日、17 日、19 日、23 日、25 日、27 日、28 日と、延俊は２～３日おきに頻繁に鷹狩りに出かけるようになる。

6　この点につき、中島京也所長から貴重な修正コメントをお寄せいただきました。文末をご参照ください。

獲物は全てが記録されているわけではないが、鶉がもっとも多く、五位鷺・鴨・雉子がみえる。なお、鶴の捕獲は確認できない。

おわりに

以上、「うつ」「とりかい」「とる」の意味するところを検討してきた。流派によっても異なるだろうから、さらなる事例の蓄積が必要だが、鷹詞の独特の使用方法を理解したうえで史料解読に取り組む必要性を指摘しえたものと思う。

ちなみに、12 月 2 日には愛宕社社僧の玄海法印が日出城で「鷹ノ書物」の写本を作っている。4 日にはその「鷹ノ書物」は豊前小倉城の細川忠利のもとに送り届けられた。具体的な書名は確認できないが、延俊の鷹に関する知識が書籍を媒介にしていること、また鷹書が伝播する過程の一つとしても興味深い事例を示しているといえよう。

＊中島京也所長からのコメント＊

野生の鷹も毎回狩りに成功しているわけではありませんので、「最初の狩猟で失敗すると、鷹は獲物を取りに行かなくなる」という事はありません。鷹の持つ基本的な生態により、鷹は空腹になればまた獲物を捕る気になります。ただ、鷹狩では鷹に嫌な思いをさせないメンタル・ケアは重要です。

鷹狩は鷹が捕った獲物を人間が横取りする狩猟方法です。最初から横取りされるとわかれば、鷹は自分の捕った獲物を持って人間から離れようとします。鷹に捕獲した獲物を食べさせるという鳥飼の目的は鷹が自分で捕った獲物を横取りされること無く、人間が目の前にいても安心して食べる事ができるという状況を体験させるためです。丸嘴（まるばし）という名称の鷹の訓練過程もありますが、これも同じ目的のために実施されます。この段階の次に、捕った獲物の代わりに他の餌を鷹に見せ、鷹の注意を逸らして捕った獲物を回収するようにします。この訓練過程が不十分だと、鷹狩で鷹が捕った獲物を生きている状態（無傷に近い状態）で人間が手に入れるという事ができません。無理に鷹が掴んでいる獲物を回収しようとすると、鷹はさらに強く獲物を握りしめてはずす事ができませんし、人間が獲物の回収のために近づくと警戒して逃げようとする鷹になります。適切に鳥飼を行った鷹なら、人間が近づいても捕った獲物を押さえ込んだままその場にとどまり、代わりに見せた餌に自分から移動して食べはじめ、捕った獲物に過度に執着せずにすぐに手放します。鷹自身がそのように行動し、自分で捕った獲物の一部を食べたと錯覚して空腹感を満たしているので、獲物を手放していますが鷹は不快な思いをしていません。人間が鷹を利用している状況下でも、鷹は常に自然界と同様、自分が獲物を食べるために狩りをしている状態となっています。

「今日鳥飼んと思ふ日ハ鷹の肉相を能々見つくろひ、必弱き鶉あらは拳はなれ鷹の知れぬ様に羽合へし、（中略）取飼て後村へ入鷹を暫し休め、その後帰るへし。必ず取飼前後に煩ひ出るものなり。心を付べし。」の文章は「鳥飼を実施する際は、鷹の空腹状態と体重を適切に管理し、弱った鶉などを鷹が自分の意志で捕獲したような状態にし、鷹が獲物を食べた後もすぐに鷹部屋に戻すような事はせず、人間が近くにいても鷹にとって不利益が無い状況にする事が重要です。鳥飼をうまくやらないと人から逃げようとしたり、獲物を掴んだまま放さないような行動をとる鷹になるので注意が必要です。」という意味になります。

出版情報

・山崎久登『江戸鷹場制度の研究』（吉川弘文館、2017 年 4 月）
・横山輝樹『徳川吉宗の武芸奨励―近世中期の旗本強化策―』（思文閣出版、2017 年 7 月）
※第四章 狩猟の復興と勢子運用の発展
※第五章 小金原鹿狩
・小宮輝之『日本人と動物の歴史 ③鳥』（ゆまに書房、2017 年 11 月）
・相馬拓也『鷲使いの民族誌 モンゴル西部カザフ騎馬鷹狩文化の民族鳥類学』（ナカニシヤ出版、2018 年 2 月）
・二本松泰子『鷹書と鷹術流派の系譜』（三弥井書店、2018 年 3 月）
・三保忠夫『鷹狩と王朝文学』（吉川弘文館、2018 年 3 月）
・水野裕史「狩野永納筆《秀吉鷹狩絵巻》下絵と勧修寺家」（『デアルテ』第 33 号、2017 年 6 月）
・東 昇「大洲藩主の猟・狩と献上・領民」（『温故』創刊第 40 号、2018 年 3 月）
・『鷹・鷹場・環境研究』第 2 号（2018 年 3 月）

受贈図書

・山名隆弘氏:山名隆弘『戦国大名の鷹と鷹狩の研究』(私家版)、2012 年
・菊池勇夫氏：菊池勇夫『近世北日本の生活社会－北に向かう人々－』（清文堂出版）、2016 年
・中島京也氏：『The International Journal of Falconry, Autumn 2016』、2016 年
・中野等氏：中野等『石田三成伝』（吉川弘文館）、2017 年
・東幸代氏：中井均編『古地図で楽しむ近江』（風媒社）、2017 年
・相馬拓也氏：Khonisbay Yedilkhan『EAGLE HUNTER Informative photo album』（Munkhiin Useg Press, Mongolia）、2017 年
・鳥取県立博物館：「池田光政展」実行委員会編『鳥取入府 400 年 池田光政展－殿、国替えにござります－』、2017 年
・佐賀大学地域学歴史文化研究センター：伊藤昭弘編『鍋島元茂－父を支え小城を領す－』、2017 年
・三保忠夫氏：三保忠夫『鷹狩と王朝文学』（吉川弘文館、2018 年 3 月）
・青森県史編さん通史部会編『青森県史』通史編２近世（青森県史友の会、2018 年 3 月）

編集後記

NEWS LETTER Vol.4 をお届けします。
日本ワシタカ研究センターの中島京也所長には、年末のご多忙のなか訪問をご快諾いただき、訪問記の掲載をすることができました。さらに、実体験に基づく貴重なコメントもいただき、重ねて交流を深めることができました。数々のご教示に心よりお礼申し上げます。
今回もとても充実した内容となりました。次回は、9月にお届けする予定です。お楽しみに(ち)。

鷹・鷹場・環境 NEWS VOL.4 2018 年 4 月 9 日発行 鷹・鷹場・環境研究会編集・刊行

〒819-0395 福岡市西区元岡 744 九州大学基幹教育院福田研究室 TEL:092-802-6019